アメツチ

鼎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アメツチ

【Ｎコード】
Ｎ５７９６Ｑ

【作者名】
鼎

【あらすじ】
ある感情に振り回された女と男の話。

P（前書き）

やっちまいました。
今後どうなるかは分かりませんが、少しでも興味を持っていただけたら。

P

古い記憶、とは言いがたい。

一瞬の非日常は長い日常の中では例え何年何十年経とうとも色褪せず……恐らく死ぬまで私に付きまとうだろう。でも、悪い事じゃない。

ただ一つ言えるのは、あの記憶は今尚私の中で最も異彩を放ち続けている断片だという事……まぁ、「記憶」と言うにはまだ青い実なのかもしれない。まだあれから何年も経っているわけではない。言い直すなら、「思い出」とでも例えれば良いのだろうか。

何にせよ、まだあの記憶は私の中では薄れてさえいない。今のうちに書き切ってしまおう。何年何十年も経って、話しのタネにでもできるように。

1（前書き）

実質一話ですねハイ

1

その日も、動きたくなくなる程の暑さが部屋に篭っていた。
部屋の窓とカーテンは何故か全て閉め切ってある。が、部屋の熱気は窓を開放していないせいでは無く、単にエアコンのスイッチが切れていただけだ。そもそも窓を開けたところで、清清しい風が入ってくるわけでも、耳を劈く蝉の大合唱が部屋に響き渡るわけでもない。それ程に自然が無いのだ、この街は。
「うぅ……っ」と篠川亜紀は大きく伸びをした。
何時間我を忘れていたのだろうか。身につけているTシャツとハーフパンツは大量の汗を吸い、ところどころでは潮さえ吹いている。腰や肩は悲鳴を上げる程に痛み、キーを打ち続けていた指の何本かはは赤く腫れていた。
何秒か目を閉じて、再びモニターに目を向けた。画面に映し出されているのは、数千行に及ぶプログラムのコード。
「ひひ……へへっ」
不自然な笑みが自然に漏れてしまう。正に頬の筋肉が緩む、といった状態だ。夏休みに入ってからというもの、睡眠と食事以外はずっとパソコンの前に座りろくに風呂にさえ入ろうとしなかったが、そんな程度の不快感は今の亜紀の持つ達成感には到底敵う訳が無かった。何しろ自分の全てと投入して完成させたといっても過言ではない作品なのだ、このプログラムは。
「あとは見直しして……名前をつけるだけ……だね」
立ち上がって数分体のあちこちを動かしていた亜紀はそう一人で呟くと、自分の汗が染みた椅子に座りなおした。

2（前書き）

やっと更新だよ…

2

「ただいまぁ」と、彼女は一人呟いた。一人暮らしの彼女へ常套句を返す者は当然居ない。

癖にさえなりつつあるため息を大きく一つつく。と、わずかな間玄関に静寂が流れた後、亜紀は吸い込まれるようにベッドへ直行した。

「眠すぎる……」

ひたすらに亜紀を襲う眠気。ぼやけかけている視界の隅の時計には午前三時と無機質な光が輝いていた。

六畳の居間。ベッドと本棚、そして部屋に不釣合いな程の大きくＰＣと、それを支える机、キャスターチェア。ただそれだけが、居間の住人だった。装飾品どころか物自体が殆ど無く、殺風景な部屋の印象を醸し出すのに貢献している。そこはいかにも奇妙で、不可思議で、精気の無い空間だった。

そして。

「あー……アメッチ……」

傍目から見れば瀕死と言われても仕方の無いような声で亜紀は声を出した。

重い体を起こし、ＰＣの前へと直行する。

常時電源がついてるそれには、依然として膨大な量の文字が書き連ねられていた。以前と違う点といえば、コードを囲むウィンドウの上に「アメッチ」の四字が上乗せされている事くらいだ。

昨晩完成し、彼女に命名された「それ」は、今か今かと目覚めを待っていた。

胸は弾む。目は輝く。頬は緩む。さっきまでの暗さなどどこかへ行ってしまった。

あとはＥｎｔｅｒキーを押すだけ。ただそれだけで、「彼女」は

目を覚ます。
一体どれだけの時間と労力をかけただろうか。指をキーに乗せながら、若干の感傷に浸る。その指さえ、嬉しさのせいか期待のせいか、微かに震えていた。
「いよいよだねぇ……『私』？」
そう言い、
キー押した。

3

部屋中から聞こえる喧騒が、事態の大きさを物語っていた。殆どの者が、各々の席で自分自身の作業に没頭している。ざっと見渡しただけで数十人は居るだろう。

だがデイヴ・ロジャーズはしかし、その喧騒の一端には無く、ただ真っ直ぐに自分を呼び出した者の元へと進んでいた。途中何度かすれ違う人とぶつかったが、相手は特に気にしている様子も無かった。それ程までに彼らは今忙しいのだろう。もっとも、単に無愛想な日本人だっただけかもしれないが。

居た。

誰が、と言われれば、デイヴをここへ呼び出した張本人がだ。彼もやはり周囲と同じように、無数のざわめきを作り出す一人の要素となっている。

「錦……本部長ですか？」

低く、威圧感のある声でデイヴが呼びかける。錦と呼ばれた男は、片手に電話を握ったまま答えた。

「ああ……そういう事で頼む、一旦切るぞ……む、デイヴ君だね？　錦で良い」

風貌からして決して若いとは言えないが、錦にはハッキリとした若々しさが、特に瞳には全く衰えの無い輝きがあった。それと同時に、言葉の節々からは人の良さがにじみ出ている。

「はい。錦さん、単刀直入に尋ねますが、どういう用件です？　あまり俺のようなグリーンカラーは出番の無さそうな雰囲気ですが」

「まずはこれに目を通してくれ。昨晩……いや、今日の未明に起きた事だ」

そう言うと、錦は机上に置かれていた、数枚にまとめ上げられた書類をデイヴに差し出した。

「『ＪＲＯサーバへのハッキング未遂に関する概要』……ここ

へハッキングが？」
「うむ。今日の午前四時頃、ここの中枢サーバへ何者かがハッキングが行った。もっとも実質的な被害も無かったのであくまで『未遂』だがな。しかし『改革派』のセキュリティ中でもトップクラスのものを破ったのもまた事実だ」
錦がため息をつきながら言う。いかにも厄介事を抱えていそうな表情だ。
「はぁ……俺はあまりそういった話に精通しているワケでは無いのですが、やはり……」
あくまでデイヴは食らいついた。錦も負けじと言い返す。
「いいから最後まで聞くんだ。この事件の犯人……つまりサーバにアクセスした者のポイントは分かっている。資料の3枚目だ」
そう言われると、デイヴは先程錦から受け取った資料を捲った。中心に赤い点を置き、周囲の地図とその住所、近隣のエリア等の情報が細かく記載されている。
「その点が犯人の拠点だ。君には……」
そこまで錦が言った時、デイヴが彼の言葉を遮る。
「……そこに行け、って事ですかね？」
「その通りだ。登録されているのはただのアパートに住む女性一人だが、事実とは限らん。それにこれ程の技術を持つ者が自分の足取りをすぐ掴まれるとも思えん」
「そこで調査の為に特殊部隊のお使いってワケか……どうして俺を？」
「くじ運が悪かったと思ってくれ。今使える者が君しか居なかった」
それは無いだろ、とはデイヴは口に出さず、心の中で呟いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5796q/

アメツチ

2011年2月15日22時40分発行